

件には皆緊張し、白系露人マキシモフの懸命の仲介で収まる異変もあった。

ソ連のノルマは厳しく、指令の機関車組み立ての目標達成のための徹夜作業は頻繁になされた。また、ソ連へ撤収の鉄道のレール運搬では、そのために腰を痛める者が続出のありさまであった。

そのうちに保安隊の呼び出しもなくなり、年も明けて草木が春の息吹を感じ芽を出すころになると、引き揚げの情報が居留民団の方から伝わり始める。労務担当員という一番睨まれる職業柄、会社の引き揚げ団体編入の最初に入れられ、仲田周一氏が団長となる。北陵の収容所で数日を過ごし、荷物検査を終えて無蓋車に乗車するころは、「故国の土を踏むことができたら、」の故国一途の気持ちは、「日本へ帰れる。」のほのかな明るい気持ちになる。途中数回の停車を経て壺芦島収容所に着く。国府軍壺芦島弁事処長から使役六十人を出せとの指令が届くが、届け出る者は少なく、自薦して義勇隊の少年たちを中心に第四十一力行隊を編成する。会社からの引き揚げ大隊を収容所から見送る。残留部隊として六月二十六・

七・八日の三日間、国府軍の弾薬運搬の使役に従事する。二十九日、夢にまで見た引き揚げ船の船尾に翻る日章旗を仰ぎ、思いは遙か日本本土の上空に飛ぶ。異国に散った同胞よ、安らかに眠れ。

生地獄だったシベリアでの労働

長野県 内海 深

私は、役場その他の人々より盛んに満州行きを勧められ、昭和十七年四月に渡満しました。

就職した所は満州国際運輸株式会社という大会社でした。大連に上陸して本社より奉天支社行きを命ぜられ、行った所は奉天支社経理課。早速に上司から勤務についてこと細かに指導を受け始めたが、大変に忙しい仕事で、これでは動まらないかと不安でした。しかし、日がたつにつれて仕事の順序を覚えて大分楽になりました。

時たま得意先へ出張があり、地理に慣れないために大分苦労しました。経理課は総員八十人くらいで、長野県人

は私一人で他にだれもおりませんでした。私は独身だったので寮に入り、若い社員と暮らして面白い日もありました。渡満する前は今の農協に当たる産業組合といわれた所に勤務しておりました。人に勧められるばかりではなく、よし、満州でなんとかしようとお望を抱いて実は渡満したのですが、ものの見事夢破れということでした。

そうして日を暮らしているうちに、物資はだんだんに無くなり統制が厳しくなり、はっきり覚えていないが十八年の秋ころより寮の食事も大豆が入りはじめ、そればかりではなく量も大分少なくなり、そのために若い社員は中国人の経営する飲食店等に出入りするようになりました。家庭を持っている人たちも毎日の話は食べることで終わり、そんなことで日が過ぎていくなかで、仕事より防空演習が毎日のように行われました。女性は防空ずきんを被り消火訓練に大変時間を取られ、大変な日々が続くようになりました。内地も大変だったと思います。

その当時一般の人は知らなかったのですが、会社の現場の人たちの話では、今日も貨車で兵隊が南方へ行ったと毎日のように関東軍の兵隊が輸送されていたようです。

新聞は毎日戦勝の記事でいっぱいでしたが、さにあらずでした。

満州は戦争はしていなかったけれど、満人がある所で暴れたというような話があり、大変に緊張した気持ちでおりました。

また、十九年の秋ごろより毎日のように赤紙の動員が始まり、会社から応召される人が大分出て、仕事も居なくなった分を分けてするようになり、大変なことになりました。忙しさが増すばかりとなりました。奉天の上空にもB29が飛来するようになり、満州飛行機の爆撃された時は大変でした。その年だったと思いますが、会社の上空で爆撃されボイラー室をやられ、修理もできないので一冬暖房なしの寒い冬を過ごすことになり、夜など内地の寒さと違うくらい厳しい暮らしとなりました。その時、満人の床屋に焼夷弾が落ち、一家全部死亡して家は焼かれ、実に気の毒でした。

そんなことで冬は過ぎ春がやってきて、やっと厳しい寒さから抜け出すことができ、遅れた仕事を一生懸命やりながら五月を迎えました。十六日ころ、会社の兵事係

から夜呼び出しがあり、急いで行ってみると二十日に入隊の令状を渡され、入隊まで何日もないので書類の整理を急いでやり、その書類を受けてくれる人がいないので課長に渡して、二十日の朝早く奉天駅より乗車しました。

四時ごろ石頭の駅に着き、部隊より卜士官が迎えに来ており引率され、部隊に入るいろいろの手続きは明日に行うと言われ、初めて軍隊の夕食をいただきました。翌朝、入隊の手続きを済ませ、それから厳しい訓練の始まりでした。その厳しい訓練が多少楽になったと思つたころ、八月十五日、忘れることのできない終戦を迎えました。

私どもの部隊は七月に安東市に移動しており、そこで終戦となつたのです。それから直ちにソ連の武装解除を受け、数日忙しい日を送りました。その仕事が終わると、ソ連の命令で奉天のコウコトンという所へ向けて、(私どもは追撃砲隊だったので)輜重車に食糧その他の物を積んで馬に引かせ、野山や川を越え、野宿しながら九日間もかかって到着しました。そこで各部隊から集まつた馬の管理等をして、その馬をソ連に向けて貨車積みをして

終わり、十一月中旬ごろ貨車に乗せられてコウコトンを後にし、着いた所はシベリアのチタという所でした。

山の木は全部というくらい松木で、住む所は何も無く約一か月近くかけて各班ごとに宿舎を造り、その間は三十五度も下がる所で焚き火をしながら野宿。寒すぎて眠ることもできず、それに、ソ連より配給になる食糧が誠に少量で悪く、今までの日本軍の食糧と比べものにならない物でした。その上、寒さが加わって病人が出始めたころ、ようやく宿舎ができあがり、作業が始まった。

その作業は伐採で、ソ連から指示されたノルマが大変厳しい量で、朝の八時ころより始めて五時ころに終わらない班もあり、厳しい作業と寒さで皆ふらふらになりました。一か月くらいで栄養失調と急性肺炎が出て大騒ぎとなりました。それでもノルマは追加されるばかりでますます仕事が苦しくなるばかり、二か月くらいで何十人と死亡しました。初めの間は日曜日に枯れ木を集めて焼いたけれども、毎日のように死亡者が出るのでやり切れなく、ついに宿舎の周りに放置するようになりました。かわいそうと思うけれどもどうすることもできず、その状態を親

兄弟が見たらどう悲しむことかと、だれも思わない者はありませんでした。

毎日の仕事は厳しくなるので、本当にちょっとでも休む暇がなく働かなければならんです。食糧が悪いといつもどんな物かというと、日本でいう雑炊に黒パンが一切れ、少々の副食という程度で、病人か何もしない遊び人でも不足という食事。これでは、とても体を保持することは大変無理なことで、それを毎日続けていたのだから生きているのが不思議なくらいで、栄養失調で死んでいくのは本当にかわいそう。夕食後いろいろ話をして一緒に寝て、明朝はもう冷たくなっているという状況です。それに慣れない仕事をしているので負傷者が続出し、中でも凍傷になる者が大分おり、本当にこの世の生地獄だったのです。

そのような苦しい状態を続けて、シベリアの春がやってまいり五月となりました。私も数人が分かれてチタの町工場に移動しました。その工場は総合工場で、木工場・旋盤工場・その他いろいろありましたが、私どもは鋳物工場で、そこから農場へも行きました。そこには帰

るまでいました。

お互いに何の音信もなく、どうなったか分かりませんが、山の状況は本当に人間の生活とは言われない悲惨なものでした。

第二のふる里満州の記

静岡県 小松 さと

当時、若い人達の心を満州へ海外へと胸ふくらます雰囲気の社会的風潮だったと思います。私もその一人、黄道楽士の言葉に誘われるように親友三人と手を取りあい熱海駅より新京迄の切符四十二円何銭かで求め日本を後に満州へ、家族の反対、特に祖母は永久の別れかのように毎日なき続けられました。今、私はその当時の祖母と同じ年齢となり、祖母の心に詫びる気持ちです。

親友三人の道中で心強く、未知の大地への憧れと希望で一杯でした。玄界灘での船酔い釜山より汽車にて車窓より眺めたハゲ山の記憶、いまだに消えません。夜行列